



夕暮れのUni E'terna (ユニエターナ) 山口吉田学生会館

山口大学学生協同組合が運営する学生宿舎が2021年3月に1号館(奥)、2024年3月に2号館(手前)が完成した。教育・研究目的で山口大学に来学する学外者、非常勤講師が利用できるゲストルーム2室も備えられている。



第44号 発行・鴻文会

山口大学人文学部・大学院
人文科学研究科・旧文理學
部文学科 同窓会

(事務所)

〒753-0831 山口市平井773-2

沖田ビル202

電話・FAX 083-928-4527

郵便振替口座 01500-4-15902

<http://kouhun.la.coocan.jp/>

メール: kobun1981@ybb.ne.jp

就任ご挨拶



山口大学人文学部長

速水 聖子

鴻文会の皆さまにおかれましては、お元気で活躍のことと存じます。令和六年四月より人文学部長を務めさせていただいております速水と申します。女性の部局長としては、私の人文学部の前任で平成一七年から大学院東アジア研究科長を務められた小谷典子先生に次ぐ二目目とお聞きしております。男女共同参画や女性活躍の環境づくりが叫ばれて久しいですが、人文学部にはそのような価値観や文化が先んじてあり、皆さまに支えられていることに大変感謝しております。

ご挨拶をかねて、最近の人文学部のことをご報告するにあたり、昨今の国立大学をめぐる明るい話題が少ないことはご承知の通りかと思えます。昨年六月には八二大学が参加する国立大学協会が大学の財政状況について「もう限界です」という声明を出したことも話題となりました。物価高騰や円安という経済状況の悪化に加えて、国立大学の大きな活動資金である運営費交付金は二〇年前からおよそ一六〇〇億円(マイナス一三%)減額されています。さらに、各大学における組織改革や様々な指標による競争によって国からの補助金の配分額が変わるといふ仕組みの導入や外部資金の獲得が求められる中、国立大学間の格差も広がっております。加えて、少子化による一八歳人口の減少も今後の大学のあり方に大きく影響することは明らかです。

このような構造的な課題の解決は至難ではあります。人口減少下での地域の再生や維持も

同時に求められております。これまで、幅広く人文学を学ぶことができる場を中国・九州地方を中心とする地域の学生に提供し、長きにわたって地方の地域社会を支える人材育成に寄与してきた人文学部の役割はなお一層強まっていると思います。

従来から、人文学部の学問は、その成果が数値化されるものになりにくく、経済的な効率性ばかりが重視される時代状況において「何の役に立つのか」と揶揄されることもしばしばでした。しかし、近年、生命科学やヒトゲノム研究、人口知能やナノテクノロジーなど先端的な科学技術の研究・利用において、ELSI (Ethical, Legal and Social Issues: 倫理的・法的・社会的課題) の概念が重要視され、科学技術と社会との関係性が注目されています。背景にあるのは、このような技術が人々の生活に多大で不可逆的な影響を及ぼすとともに、利用のされ方によっては社会に危険や混乱を招き、人々の格差や不安・分断を煽る現実を私たちが目の当たりにしているからではないでしょうか。科学技術の進歩が私たちの生活を豊かにすることはもちろん、や自明ではなく、どのように社会に実装するべきかという意味で幅広く「人文知」が求められていると思います。

もちろん、これからの社会を生きてゆく人々にとってDXやAIといった科学知とは無関係ではられません。であるからこそ、それらを技術・方法としてのみとらえるのではなく、社会においてどのように活用するのか/されるべきかを考察することが真の「文理融合」の枠組みで必要とされており、「人文知」の役割は決して小さくはないでしょう。このような中、「鴻文」の前号にて協條前学部長がご紹介した「人文ムセイオン二〇二三」は、理系分野との交流と人文学部の学問成果の積極的な情報発信という学際的な試みとしてスタートしました。二回目となった今年度の「人文ムセイオン二〇二四」では「人文学の音」をテーマに協條靖弘(西洋哲学)・小林宏至(文化人類学)・森野正弘(日本文学)・太田聡(英語学)の各先生方に報告をいただくと共に、理学部の末竹



ムセイオン2024 テーマは「人文学の音」

規哲（情報科学）・廣澤史彦（数理科学）の各先生にコメントーターとしてご参加いただきました。聴講した学生からの評判は非常に高く、前回ムセイオンにおいても「自分たちが学ぼうとする人文学のアプローチの多様性への気付き」に対する意見が多数寄せられました。今年度は理系分野の先生方からのコメントによって、さらに大きな視点から人文知にふれる有益な教育的機会にもなったと思います。理学部と人文学部は、元々文理学部としてスタートした歴史もありますが、現在「専門教育におけるSTEAM教育」での協力関係を進めているところでもあります。両学部ともに基礎学問としてのディシプリンが重視される点が共通すると思いますが、学際的協力の実質化は人文学部の教育・研究の両面において非常にプラスになるものでしょう。このように分野を超えた協働・協力体制の構築は、現在の大学を取り巻く問題状況に対処することにおいても必要不可欠なことであると思います。

二〇二〇年からのコロナ禍は大学教育にも大きな影響を及ぼしたことは言うまでもありませんが、昨年あたりから授業やサークル活動を含めて、学生にとって本来の「学生らしい生活」

が戻ってきたように思います。この間、学生には留学等の海外との直接的な交流が閉ざされた状況が続きましたが、少しずつ再開できるようになりました。人文学部独自のものとして学部間交流協定に基づいて実施されてきました台湾・東呉大学人文社会学院との学生・研究交流も今年度三月より再開実施することとなっております。この活動は人文学部後援会の補助をいただいて行っており、学生が台湾を訪れて現地・東呉大学学生と交流しながら台湾の文化・社会について学ぶ貴重なものとなっております。グローバル化の進展によって世界的な環境問題・経済格差や政治的紛争など多様な社会的課題がもたらされている昨今、東呉大学との交流活動が学生にとって人文知の学問的基礎の上でリアルな現地での交流経験による国際感覚を養う機会になればと大変うれしく思っております。後援会の皆さまに感謝しますとともに、学生にとって意義ある活動が継続できるように学部としても努力してまいります。

地方の国立大学の文系学部をめぐる状況は厳しさを増すばかりであると思われませんが、これまで人文学部が地域に対して担ってきた役割を顧みつつ、その持続と維持のために謙虚に教育・研究活動に努めていきたいと思っております。さらには、人文学部を応援して下さる方々と共に協力して下さる方々とつながり、連携しながら今後の難局に臨んでいくことができれば幸いです。鴻文会の皆さまにおかれまして、今後とも変わらぬご支援ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。末筆ではございますが、皆さまのご多幸とご活躍を祈念いたしております。

（社会学コース 教授）



萩往還入口

鴻文会役員

令和三年八月〜令和七年八月

名誉会長

速水 聖子（人文学部長）

会長

吉松 茂（昭四十六年卒・英語学・英米文学）

副会長

森重 祐二（昭五十五年卒・社会学）
渡邊 早苗（昭五十九年卒・西洋史学）

顧問

大塚 博久（昭三十一年卒・中国哲学）
田中 晋（昭四一年卒・英米文学）
岡光 一浩（昭四一年卒・ドイツ文学）
添田建治郎（昭四十四年卒・国文学）

委員

原口 公康（昭六三年卒・日本思想史学）
山本 明史（昭六三年卒・国史学）
齊藤 禎（昭六一年卒・東洋史学／昭六三年院修了）
林田 徳夫（昭五十七年卒・社会学・社会心理学・社会人類学）
山田 典子（昭六一年卒・社会学・社会心理学・社会人類学）
和崎 睦子（昭六十六年卒・社会心理学）
大谷 泰子（昭六三年卒・社会情報論）
橋本 達彦（昭五十五年卒・国文学／昭六七年院修了）
池田 容子（昭五十九年卒・英米語文化論／昭六三年院修了）
江浪 香織（昭六十七年卒・ヨーロッパ言語文学（独）／昭六三年院修了）
原田 素子（昭五十八年卒・フランス語学／昭六三年院修了）
中村稚恵利（昭六三年卒・言語情報論）

監事

吹屋 哲夫（昭五十四年卒・東洋史学）
片山 恵子（昭五十六年卒・英米文学）

学内委員

根ヶ山 徹（昭六〇年卒・中国語学／昭六七年院修了）
村田 裕一（昭六三年卒・考古学）
中国文学）

学生数

（令和七年一月現在）

人文学部	
人文学科	
1年	195
2年	198
3年	183
4年	215
合計	791

大学院人文科学研究科	
人文学専攻	
1年	9
2年	9
合計	18

資料提供 人文学部

世界の知を山口に 山口の志を世界へ
人間社会科学研究所への改組



山口大学大学院
人間社会科学研究所
設置準備委員長
杉井 学

令和七(二〇二五)年四月、山口大学に新しい大学院「人間社会科学研究所」が設置されます。この研究所は、人間社会の根源に迫る人文・社会科学の膨大な蓄積を体系的に咀嚼してその探究を深化させる「人文科学専攻」、多様化する人間行動の探究と臨床的実践力の融合を通して新たな心の科学の創成を目指す「臨床心理学専攻」、社会現象について自ら問いを発見し、その解決策を育み、豊かな社会の構築を目指す「経済学・経営学専攻」、人文・社会学と現代科学技術の融合から社会問題の実践的解決を目指す「共創科学専攻」から成る修士課程の研究所です。すでに定着しているアカデミア養成機能を保持しつつ、人文・社会科学の知識や経験から現代の課題に対応できる多様な人材を育成するため、学内の人文・社会学系の修士課程の教育体制を統合し、個々の大学院生が求める学びにきめ細かく対応できる教育体制を構築することが目的です。つまり、既存の人文科学研究科、教育学研究科、学校臨床心理学専攻、経済学研究科などが統合され、新しく生まれ変わることになります(表1参照)。

科学技術の発展、特に理工学分野の成果で社会課題を解決しようとしてきた時代を経て、それだけでは多くの課題が解決できないことに人々は気づかれました。また、学際性や分野横断的な知識・技能が必要という社会の要請は、時として論理的な判断を下さない人の感情や心理とともに、歴史的な経緯などを考慮しながら、倫理的な判断を行う人文社会科学の重要性を再認識させました。同時に、文系・理系という枠にとらわれない自由な発想力も必要であることを問いかけています。つまり、社会からの要請に応えるために設定すべきこの研究所の使命は、目まぐるしく変化する社会と課題山積の時代において、「一人一人の人間を中心にして考える社会」を生み出す人材の育成です。そして、これまでの山口大学での教育・研究の歴史も踏まえ、この新研究所のこれからの姿勢を「世界の知を山口に、山口の志を世界へ」と表現することになりました。

表1 新研究所への統合

基礎となる学部	既存の研究科・専攻名		学位・分野	人間社会科学 研究科	新設する研究科・専攻名	学位・分野
人文学部	人文科学研究科	人文科学専攻	修士（文学）		人文科学専攻	修士（文学）
教育学部	教育学研究科	学校臨床心理学専攻	修士（教育学）		臨床心理学専攻	修士（心理学）
経済学部	経済学研究科	経済学専攻	修士（経済学）		経済学・経営学専攻	修士（経済学）
国際総合科学部		企業経営専攻			共創科学専攻	修士（学術）

現代社会の複雑な課題を解決するためには、人間性に対する深い洞察力、現代社会に対する確かな分析力、発掘した問いに対する探究力などを兼ね備え、状況を冷静に判断して主体的に進路を切り開く課題解決力と専門性を身に付けることが必要と考えています。そこで、この新研究所ではこれまで行われてきた人間や社会の真理に関する深い研究機能はそのまま残し、現代の社会課題の解決と新たな価値の創造に必要な「総合知」の活用を探究する共創科学専攻を新設することとなりました。もちろん、その背景には設置準備中に行った「地域企業等を対象とした人材需要に関するアンケート調査」で、実践的研究力、複眼的思考力などを周辺企業等が非常に重視していることも考慮に入れています。

新研究所では、それぞれの分野の専門性を深化させながらも、それらを積極的に融合させ、学際的観点や複合的・分野横断的なアプローチなどを取り入れることで、より柔軟で実践性に富んだ研究力を育む教育体制を整備します。その仕組みとして、研究科や専攻を横断した教育カリキュラムや研究制度を導入します。「マスタートラックプログラム」はその中の一つで、既存の専門性の枠を超えて学生の主体的な学修を促す専門分野横断的な教育体制としてスタートします。このプログラムでは、専門分野の近い教員が所属する専攻の枠を超えてグループを作り、その専門分野の教育コースを作ります。それぞれのコースを担当する教員は独自の視点から講

義を行い、学生は同じコース内の講義を四科目(八単位)以上修得すると、その専門教育コースの認定証が授与されます。各専門教育コースの講義での取得単位は必ずしも修了要件とはなりません。大学院生の主体的な学びを重視し、高度な専門性を追求すると同時に、異なる視点で自らの専門性を捉えなおすことを目的とした仕組みとして導入します。また、異なる専攻の学生や教員との研究交流を促進する役割も期待されます。

知識や技術の学際性や分野横断的な研究の推進のために、研究科内では共創科学専攻がその役割の一端を担います。共創科学専攻は、二つのプログラムと四つのコースからなり、多文化共生コース、表象文化・デザインコース、データ理解・活用コース、人間社会・環境コースで提供される講義は、すべて履修制限無しで他専攻の学生が受講することができます。また、他研究科との連携では、専攻横断型の新しい大学院教育モデルとして導入されたプログラム(CPOT教育プログラム)に参画します。これは、理工系研究科である創成科学研究科が導入している仕組みの一つで、専門教育コースを形成したり、研究室間の交流を基に大学院生の一定期間の派遣・研修を研究科の枠組みを超えて行うことができたりする制度です。この制度を活用できれば、文系・理系を問わず大学院レベルの高度で幅広い分野を横断する研究への発展が期待できます。

令和七年四月の設置に向け、すでに入試は開始しています。初年度の学生確保は他大学でも苦労することがありますが、本研究所では各専攻とも志願者数は概ね悪くありません。変革と課題山積みの時代において、本研究所のような「人間」の生と社会の諸側面を探究する活動は、今後さらに重要視されていくでしょう。それぞれの専門的研究を深化させつつ、それらを融合して社会課題の解決策を生み出そうとする人材の涵養に向けて、今後も新しい仕組みの導入や研究・教育レベルの向上を進めていきたいと思っています。

◎令和5年度事業報告

1. 第56回役員会（5/21）
2. 第34回山口大学同窓会理事会（6/21）
3. 会報「鴻文」編集会議（11/6、2/5）
4. 会報「鴻文」第43号発行（3/1）
5. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式出席（3/22）
6. その他

◎令和5年度決算

収入総額	5,466,879円
支出総額	2,177,326円
残高（次年度繰越金）	3,349,553円

◎令和6年度事業計画

1. 第57回役員会（5/12）
2. 山口大学同窓会理事会（5/20）
3. 会報「鴻文」編集会議（2/11）
4. 会報「鴻文」第44号発行（3月予定）
5. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式出席（3/21）
6. その他

◎令和6年度予算

〈収入の部〉

科 目	5年度予算額	決 算 額
繰 越 金	3,433,850	3,433,850
会 費 収 入	1,800,000	1,760,000
賛 助 金	300,000	273,009
雑 収 入	10	20
合 計	5,533,860	5,466,879

〈支出の部〉

科 目	5年度予算額	決 算 額
会 議 費	50,000	29,262
役 員 等 行 動 費	30,000	6,000
事 務 所 運 営 費	950,000	957,110
事 務 費 ・ 通 信 費	150,000	150,961
会 報 費	750,000	791,778
ホームページ維持費	10,000	9,900
分 担 金	151,000	150,880
寄 付 金	0	0
助 成 金	100,000	15,660
慶 弔 費	50,000	5,775
予 備 費	3,292,860	0
合 計	5,533,860	2,117,326

〈特別会計〉

科 目	4年度財産	5年度財産
中 国 電 力 債	1,465,537	1,465,537
合 計	1,465,537	1,465,537

令和6年4月11日、監査の結果過誤なく的確に
経理されていることを確認します。

監事 吹屋 哲夫
片山 恵子

〈収入の部〉

科 目	6年度予算額	摘 要
繰 越 金	3,349,553	
会 費 収 入	1,800,000	10,000円×180人
賛 助 金	300,000	
雑 収 入	17	利子等
合 計	5,449,570	

〈支出の部〉

科 目	6年度予算額	摘 要
会 議 費	40,000	役員会、会報編集会議等の交通費、その他
役 員 等 行 動 費	20,000	会長・副会長等活動費、会報編集会議等の活動援助
事 務 所 運 営 費	980,000	家賃、人件費、事務所経費（電話・電気、その他）
事 務 費 ・ 通 信 費	150,000	封筒印刷6,000枚、事務印刷、郵送、消耗品、雑費
会 報 費	830,000	印刷7,200部、発送6,200通、発送アルバイト代
ホームページ維持費	10,000	レンタルサーバー料
分 担 金	151,000	山口大学同窓会（手数料含む）
寄 付 金	0	
助 成 金	100,000	「同窓会等」開催助成（手数料を含む）
慶 弔 費	50,000	他同窓会への祝い金、祝電、香典料、弔電、その他
予 備 費	3,118,570	
合 計	5,449,570	

〈特別会計〉

科 目	6年度財産	摘 要
中 国 電 力 債	1,465,537	東洋証券
合 計	1,465,537	

退任教員ご挨拶

ケヤキ並木と

一 大学人の三十余年



横田 尚俊

この文章を書いている今は、冬のまったく中であり、山大通りのケヤキ並木も寒々とした裸木をさらしている。

山口大学へ赴任したのは、今から三二年前の一九九三年四月である。バブル経済崩壊後であったが、なお経済成長最末期の余韻も残り、社会全体に「ゆとり」のようなものも感じられる時代であった。爾後、あいわたせで榎野川を渡り、ケヤキ並木が季節とともに姿を変えていくのを眺めながら、湯田温泉駅近くのアパートと学部・研究室との間を自転車で行き来してきた。

私は県内周南市(旧・熊毛町)の出身である。東京で一五年ほど過ごした後、山口大学で職を得る機会に恵まれ、Uターンした。新居のアパートは新しくはなかったが、鉄筋コンクリート造の2DKで、親元を離れて以降初めて住むバス・トイレ付きの部屋であった。在京の頃は、風呂なし、共同トイレ、時には台所も共用というような古びた木造アパート・貧民を転々としていた。最後の二年間は、母校の助手に採用してもらい、給与を得ていたにもかかわらず、引越した当日に床が抜けるという「惨事」に見舞われた六畳二間に、Uターンが決まるまで住み続けた。

赴任してまず感じたのは、大学の雰囲気の違いであった。専攻・ゼミは少人数で、教員と学生との距離が近く、先生の面倒見がよいことに驚いたのである。都会のマンモス私大育ちの私は、大学生とは自らの責任で自由に好きなことをやるのが本来の姿であり、教員が何くれとな

く指導学生に細かいケアをする必要はないと考えていた。

しかしながら、当時の社会学専攻の「上司」であった小谷典子先生(現・名誉教授)が、学生にフェイイス・トゥ・フェイイスで親身に対応する姿に接するうちに、私の考えも自ずと変わっていった。むろん、小谷先生ほどの境地にはついに到達することができなかったけれども。

赴任後まもなく大学改革の波が押し寄せてきた。まず教養部が廃止され、二〇〇四年、国立大学は法人化されるに至った。改革が実施され始めてから法人化が行われる直前まで学長を務めたのは、世界的数学者の廣中平祐氏であった。私も含めた若手教員たちは、大学の将来に不安を感じ始めていたが、実際には、有名字長の看板の下で組織再編、新たな「事業展開」(大学院東アジア研究科や時間学研究所の創設、おもしろプロジェクトの開始等)とそれを担保する予算措置も行われ、今振り返ると当時はまだよき時代であり、山口大学の「黄金期」であったとさえ感じられる。

自身が在籍したハーバード大学をものさしに大学改革を論じがちな廣中学長ではあったが、文系基礎学の領域にも理解があり、「研究は失敗してもよいのだ」と教員・学生を明るく励ましてくれる大人物でもあった。「成果は出さなくてよい」という言明とともに、人文学部には「二一世紀後半を読む」研究プロジェクトを実施するよう依頼があり、私もそれを進めるメンバーの一員として動いたことを覚えている。

その後は、法人化当初から懸念されていたとおり、大学評価が制度化されるとともに、それを盾にとった官僚統制が強まり、形式主義と細々とした規則に基づく業務が大幅に増加していった。それらは、現在、多くの大学人にとって苦痛の種となっている。

学生たちの動向について印象に残っている点にも、若干触れておきたい。

私の実感では、法人化された前後は就職状況最悪期でもあった。ある年の年末近くになって、複数のゼミ生より内定をもらったとの報告を受け、わがことのように喜び安堵したことを思い

出す。彼ら・彼女らは、決して対人コミュニケーションの苦手な学生ではなかったが、「夏頃から何社受けても内定を得られず、就職を諦めかけていた」との声を聴いて、時代の巡り合わせによる運・不運に若者たちが翻弄される理不尽さを痛感した。

もうひとつ同様な例として、(記憶に新しいが)やはり忘れられないのは、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るった二〇二〇年からの数年間である。全国の大学がそうであったように、山口大学も厳戒態勢となり、同年春の卒業式や入学式は中止となった。きちんとしたお祝いや激励の言葉も告げられないまま、卒業生たちと別れなければならなかったのが今も心残りである。

幸い、都市部に位置しないわが山口大学では、対面授業の再開もキャンパスに若々しい活気が戻るのも早かったが、それでも授業や課外活動などにはやむをえず一定の制限が課された。コロナ禍の影響からか、心身の不調を訴えるゼミ生も増えた。うれしかったのは、渦中の二〇二〇年四月に入学したゼミ生たちの卒業論文に力作が多く、全員がスムーズに卒業し就職していたことである。



新緑の山口大学通り

コロナ禍は、オンライン・ミーティングを可能にする便利な技術の普及という副産物を生み出したが、他方で、孤独な自宅学習を強いられた学生たちの、キャンパス内に足を踏み入れることもままならない現状に苛立つ声を噴出させることとなった。大多数の学生たちにとって大学とは、今も昔も、若き多感な時代に同年代の仲間たちと出会い、さまざまな時をともに過ごし、お互いが切磋琢磨することによって充実感や成長の糧を得ることのできる場所なのである。社会学コースでは、私が赴任するはるか以前から、卒業生をメンバーとする社会学同窓会が組織されている。鴻文会よりも古い歴史をもつ同窓会だと聞いている。ご多分に漏れず、有志OB・OG諸氏が組織の維持に苦慮しているのが実情だが、会のおかげもあって、卒業生の何名かとはたまに会い、酒席をともにしてお互いの近況を伝え合う間柄が続いている。それは、社会学でいうところの1・5次関係であり、「弱いつながり」、「ゆるやかな絆」に該当するが、近年ではこうしたつながりのポジティブな機能や「幸福増進効果」などが注目を集めるようになってきている。私自身も、そうした効果を実感しており、「弱いつながり」の存続に感謝している。

最後に、研究面での三十数年間を簡単に振り返りたい。私はおもに、都市社会学や地域社会学の分野で災害の研究をしてきた。ここ三〇年余の日本は、大災害が頻発する時代でもあった。雲仙普賢岳災害(一九九一〜一九九五年)や、ちようど三〇年前に発生した阪神・淡路大震災(一九九五年)では、被災地域社会(コミュニティ)の復旧・復興過程と社会変動に焦点を合わせ、大学の休業期間を利用してはたたび被災地の調査に赴いた。

二〇一一年の東日本大震災では、あの衝撃的な津波映像と未曾有の原発事故、そしてあまりにも甚大な被害に無力感さえ覚えたが、西日本にいてもできる研究はあると気づき、同僚の速水聖子先生らといっしょに、全国的に展開された新しい災害支援のタイプとその機能、支援の創発条件、原発事故に伴う遠方避難者の当事者



ジョウビタキ（オス）
人文学部前の自転車置場にて

（社会学コース 教授）

間相互支援活動の展開とその意義などについて、調査研究を行ってきた。

研究成果を思うようにはまとめられておらず、忸怩たる思いを抱いているが、科研費の研究がなお続くこともあり、今後も細々とこれまでの研究を続けていこうと考えているところである。

ケヤキ並木の推移を眺めながら自宅と大学とを毎日往復する私の生活は、まもなく終わりを迎える。今年も、春の兆しとともに新緑が芽生え、日中の強い日差しが肌を灼くようになる頃には、枝木は濃い緑に包まれていることだろう。そして、夜風が涼しく感じられるようになるとケヤキはいよいよ黄色く色づき始め、晩秋の訪れとともに茶色くなった葉っぱが冷たい風に舞い、歩道を絨毯のように覆っていく。

三十余年の間に、山口大学と人文学部を取り巻く社会環境は大きく変化し、大学・学部自体の組織・活動も変貌を遂げてきた。学生・教職員にとって好ましくない変化や腹立たしいような「圧力」も少なくない。だが、ちょうどケヤキの新緑が芽吹くように、「老兵」去りし後の大学という器にも、次代を担う若い人々が集い春の新風を吹き込んでいくにちがいない。器の色や手触りは変わっていくかもしれないが、これからその器は、知性と感性の水流で満たされ続けていくことだろう。

山口大学での三八年を 振り返って



太田 聡

私は、山口大学での在職三八年のうち、最初の九年間は（今はなき）教養部の英語科の教官として過ごし、残りの二九年間は人文学部の英語学の教官・教員として勤めた（二〇〇四年に国立大学が法人化するに伴い、「教官・事務官」という名称が「教員・事務職員」に改まった）。

私が山口大学に採用された一九八七年は、ちょうど第二次ベビーブームで生まれた子たちが受験生になり始める頃で、学生数が増えるので、教員数も増やしてよい時期であった。そのため、私は（誰かの後任ではなく、）純増枠の教員として赴任したので、研究室の仕器がどれも新品であった。

就職一年目の四月には、私は二七歳の若造だったから、例えば、授業の教材を印刷室で印刷していると、（私のことをまだ覚えていない）事務の人に「学生が勝手に使っちゃいかな」と怒られたことがあった。そのときの服装はポロシャツとジーンズだったので、間違えられないようにと、次の日はスーツで行った。すると、大学内では学生に間違えられずに済んだのだが、帰りに立ち寄ったスーパーの丸久（現在のアルク）で、今度は店員さんと間違えられて困った。一体どんな格好をして行けばいいんだろうと思ったことだった。そんなお兄さんだった私も、あつという間におじさんを通り越して、ついに定年を迎える禿げのジジイになってしまった。まさにTime fliesである。

一九九一年の大学設置基準の大綱化によって、多くの大学の教養部が廃止される方向へと動き出した。「幼稚園から大学院まで、卒業生を

出さないのは大学の教養部だけ」と言われ、その意味では確かに教養部は淋しい組織という面があった。そこで、教養部の学部化構想も提案され、色々プランが作られたのだが、どれも実現はしなかった。そして結局、教養部所属だった教官は、一九九六年の四月から既存の学部に分属させられることになり、「教養部移行教官」という嫌な名称で呼ばれることになった。

人文学部には、私を含めて一五名が異動したが、他の教員は、転出されたり、退職されたり、他界されたりして、私が人文学部では最後の教養部移行教員となってしまった。その私が定年を迎えるわけであるから、「一つの時代が完全に終わるな」というような気分にもなる。

私は、よく言えば革新的・進取的な人、普通に言えば非常識な変人であるから、同僚や学生の皆さんにはたくさん迷惑をかけたと思う。

そんな私も、一応人並みには学内の管理運営業務をあれこれこなしてきたつもりでいる。しかし、委員会仕事というのは、（もちろん、非常に専門性を求められる場合も多少はあるが、）その人でないとできないということはそれほどなくて、ローテーションで回しているだけのことが多い。よって、たくさん委員会の仕事を務めて忙しかったと言っても、自分らしさが発揮できたと思えるようなことは存外少ないものである。そのような中で、自分の経験が活かされたと思えた委員会仕事が二つだけあった。一つは附属図書館運営委員会の仕事で、もう一つは（正式な名前は忘れたが、）職員が子育てしやすい環境を作り、男性職員も育児休業を取りやすくするために規則を制定・改定するワーキンググループの仕事であった。

私には「図書館が大学の質のバロメーターだ」という持論がある。それで、附属図書館運営委員会委員になったときに、まだ比較的若手の助教教授だったが、会議のたびに、魅力ある図書館・利用しやすい図書館にするための提案を口うるさくした。また、附属図書館報に長々と四回にわたって要望・提言を記した。例えば、夜もつと遅くまで開館すべきだとか、四人掛けのテーブルでは気が散るので、間仕切りをつけ

たり、一人掛けの机を増やしたりすべきだとか、読書にふさわしい照明を設けるべきだとか、館内でひと休みできるように飲食可能コーナーを設けるべきだとか、図書館のエアコン代をケチるのはおかしいなど、様々な提案をした。そして、後になんか多くの部分が改善・実現されたことを嬉しく思うと同時に、関係者の皆様のご理解とご努力に敬意を表したい。



総合図書館

私は、妻とは大学の同級生で、修士課程修了時に学生結婚をした。先に就職した妻の扶養家族になったのであった。そして、「二〇代のうちに子どもを産みたい」という妻の希望を受けて、博士課程の学生時代に長男を授かった。乳飲み子を預かってくれるようなところを本気で探し始めたときに、ちょうど運よく山口大学に四月一日付けで採用していただけることになった。しかし、長男が三月末に誕生し、様々な手続き等があつて、（もちろん連絡した上で、）数日遅れで赴任した。すると、当時の教養部の庶務係長だった野中さんから「辞令交付の日に来ない奴なんてお前が初めてだ」と呆れられたことを、昨日のことのようによく覚えている。

一九八〇年代の終わり頃は、いわゆるバブル経済で世の中が浮かれた異常な時代だったし、家庭を顧みずに会社のために働くモレーツ社員がまだもてはやされて、「二四時間稼えますか」というCMが流行ったりもしていた。したがって、まだまだ子育ては女の仕事と思われていた時代であった。それなのに、私は家庭最優先、子育て最優先で、一七時を過ぎるととつと湯田の官舎に帰宅した。妻の尻に敷かれていたからではなく、言語学者の端くれとして、我が子の言語発達を観察・記録できる貴重な機会を逃したくなかったのである。家を建ててからも、妻が再び働き始めたので、パトナタッチしながら子育てにいらした。よって、私は、今で言うところの「イクメン」の走りだったのである。そのようなわけで、男性も含めた職員が子育てしやすい環境や規則を作る仕事というのは、経験に基づいて色々提案できたので、適任だったと思う。

また、私は、皆が担当を敬遠したりやりたがらなかったりする係を引き受けてしまうことや、新たに始まった制度などにおいて最初の担当者になる、ということがよくあった。そして、私がとんでもない目に遭い、その次からの改善につながったことがいくつもあった。

例えば、昔は、工学部に夜間主コースがあり、その教養科目の授業に行かされていた。一九九七年の一月のことだったが、夕刻、いつもの教室に行ってみると誰もいない。それで、教室が変更になったのかなと思い、工学部の教務係に行つて「英語担当の太田ですが、教室は何番になったのですか？」と尋ねた。すると、「今日は常盤祭の片付けの日だから授業は休講です」と言われたので、啞然とした(昔は、週末に学園祭があると月曜日は片付けのために休講になっていた。今では考えられないほどのんびりしているのだ)。「なんで前もって教えてくれなかったんですか」と怒ると、「非常勤講師控室に張り紙してたでしょ」という答えが返ってきたので、カッチンときてしまった。私は学内の教員として授業に行っていたので、非常勤講師控室に立ち寄りするはずがない。行か

なくていい日に工学部まで行つて、謝るところか小馬鹿にした対応をされ、ムカムカしながら帰路についた。そして、小郡まで来たところで、青信号になった交差点をゆっくり直進し始めた。横から缶コーヒーを満載したトラックが猛スピードで突っ込んできて、私の車は大破した。引きちぎられたボンネットや部品が舞い上がり落下する様子が妙にスローに見えた。「死ぬときってこんな風に見えるのかな」と思ったことだった。あと一メートルずれていたら、私の体が引きちぎられていた。トラックの運転手は「自分が百%悪い。焦っていたので(信号と車を)見落しました」と言ったのに、現場検証で警察官が作った調書では、走っている車同士の衝突だからという理由で、私も三割悪いことにされてしまった。お釈迦となった愛車をレッカー車で廃車処理場まで引張ってもらったときに、レッカー車の運転手さんに「明日絶対病院に行つたほうがいい」と促され、翌日病院に行くと、「首の骨が一部欠けているから後遺症が出ますよ」と医者に脅された。そして、新たに買った車はワンランク下のもので我慢したのだが、それでも保険金ではカバーできず、結局、冬のボーナスから六〇万円持ち出しとなった。この踏んだり蹴つたりの事故が有名になり、その後、吉田地区と常盤・小串地区間では行事等のお知らせが密に行われるようになり、また、公用車によるシャトル運行なども整備されていった。

今ではすっかり当たり前になった高大連携の一環としての「出前講義」も、私がトップバッターとして、熊本県の八代高校まで行かされた。しかし、初めての試みでは、どちらが何をどのように分担するのがまだはつきりしていなくて、高校側は「大学教員が来たがっている」という意識だっただろうし、大学側は「高校側が来てもらいたがっている」という意識だったと思う。それで、私は八代市までガソリン代・高速道路代を使って往復したのに、麦茶が一杯出されただけで、謝金・交通費は一切出なかった。後日、報告書を書くように求められたので、「教員個人が自腹を切つて遠くの高校まで出か

けていくのはおかしい。そこまで高校に媚びないといけないのでしょうか」と書いた。それが村田副学長の目に留まつて、「これはおかしい話だ」となり、その後は、謝金・交通費を高校側が出さないときには大学が出す形になっていった。これも私の犠牲による改善例の一つと言えよう。

他にも、公開講座の一種であるサタデーカレッジの担当や、教員免許更新講習の講師担当なども、私がトップバッターの一人だった。そして、それらでも、私の失敗や苦勞が次年度の改善へとつながった。



サンタクルーズ時計塔

三四歳のときに文部省の在外研究員(若手)としてカリフォルニア大学サンタクルーズ校で過ごせたことは、我が人生における最も充実した時間となったと感謝している。ところで、この在外研究の派遣期間が私のときには最長で十ヶ月間であったことが残念であった。文部省としては、受け入れ機関が夏休みになってしまえば大して研究など行えないだろうということだったのだろうと思う。しかし、引越しの準備や様々な手続きなどがあつて、一年間の派遣でないと、十ヶ月間じつくりと研究はできない。また、例えば、八月に行つて翌年の六月に帰国しても、前期の途中なので授業はどのみち受け持てない。こういった要望・感想を報告書に書いたところ、その後は若手の在外研究期間が一年間になった。もちろん、それを私の手柄だと

言うつもりはないが、きつと、私と同じような意見の人が多かったのだろうと思った。私の拙い意見も改善の一助になったのであれば幸いです。

ところが、四二歳のときに、再び在外研究員候補に選ばれ、学内での推薦順位が一位となり、「太田先生は来ないですね」と事務の人たちからも言われていた。ところが、文部科学省の審査で落とされてしまった。「ニュージーランドのオークランド大学アジア研究学科で日英語のアクセントの対照研究をする」という計画書が、私としては大真面目だったのだが、文科省の役人にはふざけているように見えたのかもしれない(あつさり「ハーヴァード大学に行きます」とでもしておけばよかったのだろうか……)。「学内で推薦順位一位になっておきながら蹴られる人も珍しい」と担当事務の人に同情されたことだった。しかし、その代わりに、翌年のサバティカル休暇を取得でき、それなりに研究に専念できたし、海外出張もできた。また、老いた父の介護をし、最後を見取ることができたことも、かえって幸いであつた。ちょうどサバティカル休暇をとったときに、図書館の中村館長が私の図書館への情熱のようなものを買ってくださり、副館長への就任要請をいただいた。が、サバティカル制度を山口大学に定着させることも大事だと考え、せっかくのオファーをお断りした(喜んでお受けしていれば、もう少し出世したかもと思わないでもないが(笑))。

教養部時代も、そして人文学部に移ってから、(授業はいい加減だったが、)自分で言うのもなんだが、結構学生たちを可愛がったと思うし、お節介なくらい学生の世話を焼くこともあつた。私は、大学三年生の夏休みの二ヶ月間、アメリカ人の恩師ポール・グリーンシ先生とのツテとコネのおかげで、ロサンゼルスからニューヨークまで、途中の様々な州で(全くの無償で)ホームステイをさせてもらったり、大学の寮に安く泊めてもらったりしながら、安上がりなグレイハウンド(バス)で横断する旅をしたことがある。この旅で私の価値観・人生観

が一変した。その後も、アメリカには何度も行く機会があり、数えてみると、五〇州のうちの三〇州を訪れている。そこで、私の授業の受講生たちの中に「在学中に海外に行ってみてください」と言う学生がいれば、私自身が経験した旅のことを紹介して、ほとんど同じ内容の旅に行かせたのだった。（現在のように海外の大学との交流協定が盛んになり、短期語学研修であれば、希望すれば、そしてお金を払えば、誰でも参加できるようになる前の、）一九九一年から二〇〇一年の間に、約三〇〇名の学生たちにアメリカを旅させたのだが、それが、彼・彼女らの人生を大きく変えたに違いないという自負がある。説明会を開いたり、色々と事前・事後のお世話をしたりするのが大変で、休日を返上してあれこれ教えたものだったが、世話した学生たちの多くとのよき関係が今もしっかり続いていることを嬉しく思う。

私も、若い頃にはまだ野心があつて、山口に骨を埋める気などなかった。「三、四年したら都会のもっといい大学に移ろう」と当初は思っていた。しかし、だんだん住みよい山口が気に入ってしまった、さらには、山口市は土地が安いので、公務員の給料でも家が（論語ではないが）三〇にしてタつてしまった。そこで、考え方を变えて、「あれがない、これがない」と山口にないものを挙げて文句を言うのではなく、「こんないいところがある、あんないいところがある」と山口のよいところを見つけて褒めるようにした。研究面でも、人文学部の山本和之先生が主催される英語学研究会（別名「山本学級」）で、毎週金曜日の午後七人のメンバーで楽しく有意義な議論ができ、大いに勉強になった。一人だけならば、ついついサボっていただろうが、コッコツ研究を続けられたのはこの山本学級のおかげであった。また、山本先生をはじめとする諸先輩方が集めてくださった理論言語学・英語学の文献が山口大学にはたくさん揃っていたこともありがたいことであった。そしていつしか、「山口にいても都会の大学にいる人に負けないようなことができることを示すことを自分の使命にしよう」と、ちよつと

かっこつけすぎのようなことを思うようになった。

それから、人文学部に移つてからの私は、学生たちを褒めるようにした。「学生は〇〇も知らない・できない」と出来ない学生のことを嘆く同僚もいたが、私は、ちよつと出来が悪いくらいの子の方が好きであった。そして、「いい学生たちに恵まれた」と自己暗示にかけているうちに、だんだんそれが本当のように思えてきた。つまりは、山口大好きおじさん、学生大好きおじさんの出来上がりであった。授業中に「いい学生に恵まれて、僕は幸せな大学教員だと思ふ」とつい言ってしまうこともよくあつた。そして、他県に住む友人や学会仲間に山口のことを自慢しまくつた。また、可愛い学生たち（いわゆるゼミ生に限らず、よく話をするようになった学生なら誰でも）に、山口のいいところを知ってもらいたいし、楽しい思い出をたくさん作ってもらいたかったので、市内・県内の名所・旧跡を見せて回つたり、趣味の山登りに連れて行つたりした。また、学生たちは、普段は節約してそんなにいいものを食べていないだろうから、自分が気に入っているお店のランチによく連れて行つた。さらには、拙宅でのBBQやクリスマスディナーに招くこともよくした（コロナ禍の期間はこういふことが気軽にできなくて残念であつたが……）。

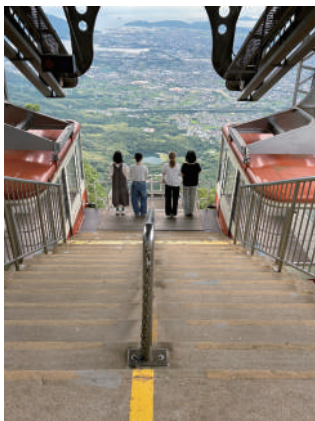
例えば、東京で働いている教え子たちと東京出張の折に待ち合わせて再会することや、他県で働いている教え子が山口に来る用事のついでに拙宅に立ち寄ってくれることが時々ある。そんなときによく言われるのが、「先生に教わつた理論のことは全然覚えていません。でも、先生に連れて行つていただいたお店のことはよく覚えてます」という冗談である。

懐かしい卒業生たちはたくさんいて、その顔は浮かんでも、皆の連絡先がわかるわけではない。卒業生のうちのごく一部である、SNSでたまたまつながつていた数十人にだけ、最終講義の案内を送らせてもらった。すると、随分遠方からも「参加します」という返事が来て、嬉しいやら、恐縮するやらであつた。そして、何

人も「先生の雑談、脱線話をまた聞きたいです」といったことも書いてあつた。普通の人がしないような経験をたくさんした（殺人事件現場で指紋を取られたことや、東京都庁で不審人物として警備員に羽交ひ締めにされたことさえあつた）ので、雑談ネタだけは豊富だったようである。結局のところ、私は、教育熱心とは程遠くて、ずけずけ失礼なことを言いまくる、いい加減さの塊のような教員であつた。「人間は頭使うか、お金使うか、気を遣うかだ。お前ら使つて頭とお金がないなら、『氣』くらいいつかえ」など、なんちゃらハラスメントすれすれのようなことを言つても、学生たちは笑つて許してくれ、慕つてくれて、ありがたい限りであつた。そして、もちろん私が学生たちへ愛情を注いだのは、自分が家族に恵まれればこそであつた。愛情の源泉は家族であつた。そして特に、私を好きにさせてくれた働き者で寛大な妻には、感謝してもしきれない。

おめでたい奴だと笑われそうだが、「本当に日本一幸せな大学教員であつた」とつくづく思う（と綴りながら、涙が込み上げてきた）。

（欧米言語文学コース 教授）



大平山山頂公園

山口大学人文学部を 退職するにあたって



滝野正二郎

私が山口大学に赴任したのは今から三八年前、一九八七年四月一日のことでした。八木充学部長から辞令を頂戴したその日のことを昨日のこのように覚えております。その一九八七年は、今から振り返れば、世に言う「バブル景気」まっただ中のことではありましたが、世情に疎い私は当時、世の中がそのような好景気にあるとは、全く実感しておりませんでした。ただ、人文学部に教員として赴任するなり、ブルーハンターズという人文学部教員のソフトウェアチームに勧誘され、その一員とならせていただいたのは、今から考えれば、大学の教員に余裕があつたということなのだろうと思います。

その頃、人文学部には東洋史の教授として畑地正憲先生がいらっしゃいました。本学部に採用される以前、畑地先生とは私の大学院の先輩の結婚式と学会でお会いしたのみでしたが、お髭が大変ご立派で、一見恐そうな方でありながら、その笑顔が大変魅力的な方だという印象がございました。山口大学に赴任して以降は、学生気分が抜けず、社会人としての礼儀も十分に弁えておられぬ私を厳しくも優しくご指導いただきました。本当に感謝いたしております。畑地先生ご退官後の二〇〇二年には馬彪先生が東洋史の教授として赴任されました。先生からは、歴史を考へ叙述する立脚点や視点の違いというものをご教授いただきました。私は外国人として中国の歴史を研究しているのに対して、先生は当然のことながら自らの属する文化・文明の問題として中国の歴史を研究され、それを学生に語る際にも中国人と日本人の共通点を強調

して語っておられました。これは、中国人と日本人、中国社会と日本社会の差異を強調する私とは全く異なるところでした。これらの相違を踏まえることにより自らの立脚点を更に明確化できましたので、誠にありがたく存じております。

山口大学人文学部在職中最大の思い出といえば、やはり赴任二年目一九八八年一月から翌年一月にかけて行かせていただいた山東大学での在外研修です。山東大学の所在地である山東省済南市は、当時、外国製品などマールボロのタバコ以外はほとんどなく、自転車を買っても、そのままでは乗れず、一度、街頭の自転車修理屋さんに持って行って、ネジを締め直したり、ペーシングのボールを足してもらわねばならないような、日本人から見れば大変不便な場所でしたが、それこそ人間が生きていく原点すなわち或る意味での「歴史の基本」に引き戻されるような貴重な経験をさせていただいたと思っています。研究・学習面では、留学生向けの中国語クラスで中国語を習得させていただいたほか、一九八九年の四月から五月にかけて、外国人未開放区域にあった山東省西部の聊城市や臨清市において大運河の一部である山東運河の現状を実見するという誠に貴重な機会をいただきました。九月から一〇月にかけて、杭州・蘇州・揚州・淮安など長江下流域の大運河沿岸都市を巡視することができたことは、私の中国明清時代交通史研究に裨益するところ大でした。

山東大学での在外研修中最大の事件は、かの天安門事件です。一九八九年六月四日、私は、山東大学主催の留学生修学旅行に参加して山東半島北岸の煙台という都市にいました。夜七時過ぎ、ホテルの食堂で他の日本人留学生らと食事しながら話していると、西ドイツ人の友人がやってきて、「今、北京が大変だ、市街戦になっっているらしい」と教えてくれました。日本にいた方には考えられないかもしれませんが、軍による天安門広場制圧から十数時間後のこの短波ラジオを取り出し情報確認を急ぎました。



天安門事件前の学生運動期間、山東大学に出現した「民主の壁」(壁新聞の掲示場)

「人民解放軍が人民を撃ったーそんなことおかしいじゃないか、天安門広場の学生は減ってきているといっているじゃないか、なんでや？」という考えが頭の中を駆けめぐりました。四日ほど短波ラジオを聞かず、その日午後七時のテレビニュースを見なかったことを悔やみました。その日の夜一〇時のテレビニュースに天安門関連の報道はありませんでしたが、その普通のニュースを、黒い喪服を着た女性のアナウンサーが涙ながらに読み上げていました。山東省内の状況は、そう切迫したものではありませんでしたが、予定を切り上げて済南に帰りました。山東大学には、大学主催の旅行とは別に独自で旅行にでた日本人留学生が多数おり、彼らとの連絡がとれず大変でした。なかには、六月三日に天安門広場にいらしたという者までいたのです。北京の外交官アパートが人民解放軍によって狙撃され、北京の状況は益々切迫していつていくように思えました。比較的平穏な済南の状況を目の前にしていると、まるで真綿で首を締められていくようでした。六月一日、私と友人のS君は大連を経由して成田へと帰ってきました。税関を通過して空港を出たとき、どちらからともなく「日本は、どうしてこんなに平和なんだ」という言葉が口をついてきました。本当に日本は平和でした。

この山東大学での在外研修に加えて、一九九

五年に北京の中国人民大学で、二〇一一年に台湾の中央研究院歴史語言研究所で在外研修させていただきましたが、この二度の在外研修において、大量の文書を閲覧しつつ研究を進めることができたことは、中国の行政文書を主に用いて研究を進めている私にとって非常にありがたいものでした。特に一九九五年の研修の折には毎日、第一歴史档案館という公文書館に通い、十カ月間で約一五〇〇件の文書を閲覧し、そのなかの約四〇〇件を使って、奏摺という行政文書が全国各地から北京に送られる所要日数を割り出す成果を得ることが出来ましたが、これなどは日本にいたのではとてもできない研究でした。



中央研究院歴史語言研究所
文物陳列館

山口大学での授業の思い出と言えば、やはり史料講読や演習のことです。東洋史分野では学生に漢文史料を読解させる講読や演習を行うのですが、彼らはその予習を東洋史の研究室で行います。彼らにとって少々難しめの史料をテキストとして与えていますので、なかなか予習が進みません。そこで私の所に質問に来る学生に対して、参照すべき史料を紹介するなど予習の仕方や参考となる知識を教えたりしていました。演習や講読を課している教員自身がその予習を「手伝う」という一種奇妙な方法を探っていたことになりましたが、なかには、「真夜中の授業」と言っても、却って楽しみにしてくれてい

た学生や、史料読解能力がめざましく向上した学生もあり、私にとって心愉しい時間でもありました。人文学部の東洋史分野に進んでくる学生諸君は一緒に素直で、純粹な知的好奇心に溢れており、これは教師にとって大変嬉しいことながら、彼らに対して、その知的好奇心を十分に満たす教育をしてあげられたのか、今でも不安に思っております。

人文学部の諸先生方―特に、歴史学・中国学分野の先生方―と事務職員の方々には大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。人文学部の「理念・目的」の冒頭には「生きることの根源的な問いにかかわり」とあり、「教育理念」には「『人間とは何か』という根本的な問いかけを共有し」とあるように、人文学部とは「根元」「根源」を大切に学ぶ学部だと思えます。世の中では実学を偏重する風潮が幅を利かせていますが、人文学部の皆様方には、今後とも時流に流されることなく、人間の根元や根元に立脚し、そこから学問的に真実に迫っていくという姿勢を今後も守っていただきたいと思います。

(歴史学コース 准教授)



台北の国立故宮博物院前にて

着任教員ご挨拶

山口での新たな歩み

藤原 慶樹

昨年四月より山口大学に着任いたしました、藤原慶樹と申します。人文学部欧米言語文学コース英語学分野に所属し、人間の脳に備わる言語機能の構造を、文法（統語論、意味論）や言語獲得の観点から研究しています。着任から約一年が経ち、改めて教育・研究生活の充実を実感するとともに、山口の豊かさに触れる日々を送っています。さらに、個人的なことですが、一昨年娘が誕生し、人生の転機を非常に恵まれた環境で迎えられたことをありがたく思っています。

山口に来る前は、アメリカのコネチカット州に八年間滞在していました（もともと、休みのたびに日本に戻っていました）。そこでは、野原や湖、シカやリスに囲まれた生活を送り、落ち着いて研究に励むことができました。東京育ちの私にとって、コネチカットでの生活は新鮮で、魅力あふれるものでした。

山口大学への赴任が決まった頃、コネチカットの友人から「山口はどんなところ？」とよく聞かれたのですが、そのたびに私は、「日本のコネチカットみたいなところだよ」と答えていました。私が暮らしていたウィリマンティック・ストーズは小さな町ですが、ニューヨークやボストンへは車で二〜三時間で行ける距離にあります。同じように、山口からも博多や広島へ二時間ほどでアクセスでき、どちらも地方都市でありながら、気軽に大都市へ行ける環境にあります。

昨年一月、ちょうど学会でコネチカットに戻る機会があり、仲間たちと再会した際には、「山口はコネチカットみたいだけど、コネチカットより便利で、文化的だ」と誇りをもつ

て伝えました。コネチカットでは、車がなければ買い物に行けないような地域に住んでいましたが、山口はさすがに日本ということもあり、徒歩圏内に自動販売機、コンビニ、スーパー、ドラッグストア、飲食店がそろい、コネチカットの生活にはない利便性があります。また、山口市での暮らしには、七月の山口祇園祭、八月の山口七夕ちようちんまつりといった伝統行事があり、雪舟やフランシスコ・サビエル、大内氏にゆかりのある文化や史跡など、歴史を身近に感じられる環境があります。さらに、山口は山と海に囲まれており、その点でもコネチカットに劣らない自然の魅力があります。



2024年4月1日 辞令交付式前娘とともに

山口に来て特に印象深かったのは、初夏に現れる蛍の観賞でした。五月末、毎夜多くの地元の方々が蛍を眺めながら川の上流へ歩いていきます。そこに家族三人で参加すると、地元の方に囲まれ、山口市民の一員になれたような土着感があり、温かく迎え入れてもらったような気持ちになりました。かつて好きだったコネチカットの暮らしよりも、より良い環境に移ることができたのだと、大変嬉しく思っています。

山口大学に着任してまず感じたのは、同僚の先生方や大学職員の皆さまに恵まれた、大変良い職場であるということでした。職員の方々には、教員とのやり取りの中でも、形式的な対応ではなく、人と人との関係で接していただいております。また、同分野の太田聡先生や上田由紀子先生には、こんな若造に対しても、リスベクトを持って接していただいていることを実感

しております。普段お世話になっている職員の方々や先生方には、恐縮するとともに、大変感謝しております。

大学教員の生活について、私がこれまで多くの先輩達からお聞きしていたのは、大学教員になると研究ができなくなるということでした。もちろん、研究を続けている優秀な先生方は多くいらっしゃいますが、卒業後まもない先輩達から「教員になると研究ができなくなる」という話を聞くたびに、その厳しさを覚悟していました。しかし、山口大学に着任し、この一年を振り返ると、そうした懸念とは裏腹に、多くの学会発表や講演の機会に恵まれ、論文執筆も順調に進みました。さらに、来年度の研究発表も決まり、今後取り組むべき研究課題も多数見つけることができました。まさに「研究カンブリア期」とでも言えるような一年で、多くの研究の芽を育てることができました。この成果は、大学教員としての新たな研究生活を歓迎するかのよう to 思え、研究を続けられるこの環境に、ただただ感謝するばかりです。

私の言語学者としての使命は、研究による分野貢献はもちろんのこと、学生教育を通じて学問に貢献することにあります。実力を重視する社会の流れの中で、人文学、すなわちヒューマニティーズ（Humanities）は、世界的に下火になりつつあります。こうした状況に対し、言語学教育を通じて人文学を支え続けていくことが私の願いです。

一年間を振り返ると、着任当初はまだずりばいすらしていなかった娘が、ハイハイを始め、立ち、歩き、今では「ママ」、「パパ」と話せるまでに成長していることに驚きを隠せません。この一年、新しい生活環境の中でも、大きなストレスなく、安心して過ごせたのは、山口の地と山口大学、そして支えてくださった方々のおかげでございます。新たな生活の場として温かく迎え入れていただいたことに、心より感謝申し上げます。

（欧米言語文学コース 講師）

令和五年度

学部卒業生・大学院修了生の進路状況

(人)

	学部卒業	大学院修了
建設業	7	
製造業	13	1
情報通信業	16	1
運輸業・郵便業	2	
卸売業・小売業	15	
金融業・保険業	11	
不動産業・物品賃貸業	2	
学術研究・専門技術サービス業	4	
宿泊業・飲食サービス業	3	

(人)

	学部卒業	大学院修了
生活関連サービス	4	
教育・学習支援業	15	4
医療・福祉	7	
複合サービス事業	3	
サービス業	12	
公務	33	
上記以外の就職先	3	
進学	14	1
合計	164	7

人文学部教育職員紹介

(令和七年一月現在)

学部長(併)

教授 速水聖子

○人文学科

哲学コース

教授 脇條靖弘

教授 Djumali Adam

教授 柏木寧子

教授 藤川哲

教授 村上龍

教授 栗原剛

准教授 横田蔵人

講師 伊藤裕水

歴史学コース

教授 竹中幸史

教授 真木隆行

准教授 滝野正二郎

准教授 村田裕一

准教授 池田勇太

准教授 石田俊

准教授 南雲泰輔

准教授 黒羽亮太

講師 鈴木舞

社会学コース

教授 横田尚俊

教授 高橋征仁

教授 速水聖子

教授 谷部真吾

教授 小林宏至

准教授 山口睦

准教授 桑畑洋一郎

日本・中国言語文学コース

教授 根ヶ山徹

教授 和田学

教授 森野正弘
教授 野坂昭雄
教授 尾崎千佳
准教授 更科慎一
准教授 安本真弓
講師 中元さおり

欧米言語文学コース

教授 太田聡

教授 池園宏

教授 武本雅嗣

教授 上田由紀子

教授 de Boisseu Michel

教授 外山健二

准教授 下寄正利

准教授 乾秀行

講師 Kateryna Olha

講師 藤原慶樹

図書館司書養成課程

准教授 伊東達也

資料提供 人文学部



シロハラ
国際総合科学部前にて

研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)
同窓会に対する助成要綱

(目的)

第一 この要綱は、鴻文会会員相互の親睦と交流の活発化を図るために開催される研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会(以下「同窓会等」という。)に対する助成について必要な事項を定めることを目的とする。

(助成の対象)

第二 助成の対象は、鴻文会正会員の参加者が五人以上の同窓会等とする。

(助成の内容)

第三 助成は、正会員の参加者一人当たり千円とする。ただし、二万円を上限とする。

2 同一同窓会等に対する助成は、一年度一回限りとする。

3 同一同窓会等に対する助成は、毎年度は行わないものとする。

(助成の申請)

第四 助成を受けようとする同窓会等は、同窓会等の開催日の一週間前までに助成申請書(別紙様式1)に参加者名簿(別紙様式2)を添えて提出するものとする。

(助成の内定)

第五 同窓会等から助成申請書の提出があった場合、鴻文会会長(以下「会長」という。)はその内容を審査し、当該申請が適当であると認めたときは、助成を内定し、その旨を代表者に通知するものとする。

(報告書の提出)

第六 同窓会等は、同窓会等の開催日以後一週間以内に開催報告書(別紙様式3)を提出するものとする。

(助成の決定等)

第七 同窓会等から開催報告書の提出があった場合、会長はその内容を審査し、助成が適当であると認めたときは、助成を決定し、代表者の指定した口座に速やかに助成金を振り込むものとする。

(会報原稿の提出)

第八 助成を受けた同窓会等は、鴻文会の発行する同窓会報「鴻文」(以下「会報」という。)に同窓会等の開催報告を掲載するものとする。

2 会報原稿の形式は、次の各号に掲げるとおりとする。

(一) 本文の書式は、タテ一行二一字とし、分量は、全五五行以内とする。

(二) 本文とは別に、タイトル及び氏名を文頭に置き、卒業年次、卒業年及び専攻を()内で文末に表記する。

(三) 会報原稿には、当日のスナップ写真又は記念写真を添付する。

(四) 会報原稿の締切りは、九月末日とする。

(その他)

第九 この要綱に定めるもののほか、同窓会等に対する助成について必要な事項は、会長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成二四年五月一九日から施行し、同日以降に開催される同窓会等に対する助成から適用する。

同窓賛歌

上京の思い出



山本 孝夫

私は昭和三〇年に山口大学文学部英米文学科を卒業しました。恩師池本喬先生との出会いをはじめ在学中の思い出は多々ありますが、卒業論文の作成はとくに大きな思い出のひとつです。卒論のテーマは三年生になって本気で考え始めました。そのおりに、漱石が帝国大学在籍中（二十七歳）、「英國詩人の天地山川に対する観念」と題して講演していたことを知りました。この講演原稿を読んでロバート・バーンズというスコットランドの詩人に出会い、バーンズを卒論で取り上げようと思いました。英文学者の斎藤勇氏も『イギリス文学史』にHans Hechtの『ROBERT BURNS』をあげていました。私は是非ともこの研究書を手に入りたいと思い、上京することにしました。丸善書店で赤い表紙の本が書棚にあるのを見つけて安堵したものです。目あての本を購入できた安心感もあって、私は銀座通りのとある画廊にぶらりと入りました。展示作品を一通り見て立ち去ろうとしたとき、着物姿の大柄な老人が入ってきました。見るからに威厳がありました。ひとかどの人物だろうと思って側で見ていると、墨黒々と達筆で「武者小路実篤」と記帳されたのです。明治一八年生まれの実篤はそのとき六八歳です。黒みがかかった着物に濃い渋茶色の羽織姿で恰幅がよく、とくに坊主頭が人並み以上に大きかったことが印象的でした。偶然とはいえ、この偉大な小説家を間近に見て圧倒させられた感がありました。興奮冷めやらぬまま、私は上野公園へ向かいました。

公園内を散策していると「ルオー展」の看板が目に入りました。秋晴れの爽やかな午後、

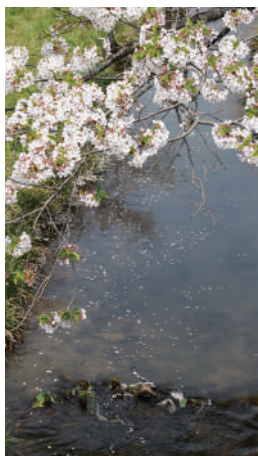
軽い気持ちで「ルオー展」にも入ってみました。

最初に目にとまったのは「石臼をまわすサムソン」の素描でした。横が一メートルほどで縦が少し長い長方形の画用紙に描かれた絵が画架に立てかけてあったように記憶しています。私はそれまで絵画展などへ足を運んだことはありませんでしたが、初めて見るこの絵に引きつけられ石臼をまわす盲目の半裸体の男の苦しそうな表情を凝視したのです。この後数年して「サムソンとデリラ」という『旧約聖書』に出てくる物語の映画を見てサムソンのことを知ったのですが、その時はただ何ともなく引きつけられたのです。この絵の外に数点の油絵を見ましたがそれらの作品はよく覚えていません。

ところが、ある肖像画の前に来たとき、私はふたたび釘付けにされました。なぜその様な心理状態になったかはわかりません。崇高な念に打たれたとも申しましようか。絵の説明には「女のピエロ」とありました。ピエロといえ一般的には下賤な女性です。それが何とも言えない不思議な気品をたたえていて、私はここでもまたじっと見入ってしまったのです。今回はずいぶん長く立ち尽くしたのを覚えてます。

そうしていると係の人から閉館の合図があり、私は我に返ったような気持ちで会場を後にしました。入場料を払って結局二枚の作品だけを見たことになりました。それでも充分満足できました。上京してはからずも東西の優れた人物と作品に接し、その後の私の人生に何がしかの糧になったと思います。あの時から七〇年、いまだに忘れる事の出来ない不思議な思い出です。

（文壇第三回卒 英米文学）



ホームカミングデー

特別講演会

二〇二四年一月二日、山口大学大会館において、人文学部卒業生の近藤奈津美さんが登壇し、「自衛隊初 女性海将」となって 今伝えたいこと」と題して講演会が開催されました。



近藤奈津美さんは昭和六三年に語学文学科を卒業し中学校教員（国語）を経て平成元年に海上自衛隊に入隊、令和五年一月には女性初の海将となり、大湊地方総監に就任されました。この度は山口大学同窓会からの講演依頼を快諾してくださり、母校での特別講演開催となりました。

講演会に参加した人文学部学生からは、「学ぶ点が多く、在学中に人間性を磨き社会にどう活かせるかを考えていきたい。」「これから社会に出て行くうえで大切なことや意識すべきことなど、様々な物事へ視野を広げ、向けることの大切さを学んだ。今後に活かしていきたい。」「などの感想が寄せられ、先輩からのメッセージをしつかりと受け止めていました。



後輩から花束贈呈

原稿募集・投稿要領

編集部からの依頼原稿だけでなく、会員からの自主投稿によっても会報の編集を進めます。

ご自身の学窓時代の思い出と、現在の近況などを綴った原稿をお寄せ下さい。

投稿要領は次のとおりです。

- （一）本文の書式はタテ一行二一文字とし、分量は全七二行以内としてください。
- （二）これとは別に、
 - ①タイトル、
 - ②氏名、
 - ③自身の顔写真一枚を文頭に置き、
 - ④文末に文理または人文卒業年次・専攻を必ず（ ）内に表記してください。
- （三）顔写真以外に写真を掲載することも可能です。
- （四）掲載は全体で半頁（二段）組みとします。半頁以内に掲載できるよう配慮してください。半頁を越える場合は、その分だけ文章の削減をお願いすることがあります。
- （五）明らかな誤字、脱字、それに文法上の誤記などについては、編集部で補訂します。
- （六）以上、今号の「同窓賛歌」頁を参照ください。
- （七）会報は鴻文会ホームページに掲載します。
- （八）原稿は返却しません。写真は返却します。
- （九）送稿には、印刷費削減のためメールをご利用ください。
- （一〇）送稿先は当会事務所内、編集部宛。
- （一一）締切りは、毎号とも一二月末日とします。

研究室同窓会・同期会だより

二〇二四年度社会学研究室
東京支部同窓会開催

阪本 良太

社会学同窓会東京支部で幹事をしております阪本良太(平成一三年卒・小谷ゼミ)です。社会学同窓会東京支部では、毎年年初に同窓会総会、ならびに懇親会を開催しておりますが、新型コロナウイルス感染症の流行もあり開催をしばらく自粛しておりました。この度二〇二四年二月一七日(土)に東京・四谷の主婦会館プラザエフにて数年ぶりに同窓会を開催いたしました。

ここ数回は恩師の先生方やゆかりのある講師の講話の後に宴会を行う形式でしたが、今回は久しぶりの開催ということもあり、コロナ禍中の積もる話や近況を話す時間にして旧交を温めました。小谷典子先生、坪郷英彦先生、横田尚俊先生に恩師としてお越しいただき、参加者は人生の大先輩から大学院在学中の学生まで、総勢一九名となりました。



個人的に印象に残ったのは、参加者のうち二名が在学中とは異なる分野でのさらなる学びを求めて、大学に再入学するという話でした。生涯学習やリスキリングについて、今後の自分について考えさせられる出来事でした。

社会学同窓会東京支部は、おおむね東海地方以東の東日本にお住まいの同窓生の皆様のご参加をお待ちしております。例年は一月最終土曜日に集まりを企画しております。就職や進学、転勤や転居などで東日本へ来られた社会学専攻の卒業生を中心に、お越しくださる恩師の社会学の先生方と久しぶりにお話しされたい方は在所を問わず、人文学部の卒業生で当会に興味があるよとおっしゃる方、皆様歓迎いたします。鴻文会よりコンタクトをお待ちしております。

参加された同窓生の皆様、都合をつけてご参加いただきました恩師の先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。

(人文第二〇回卒・社会情報論)

人文学科二期生・

西洋史研究室

金山 勉

山口大学人文学部人文学科西洋史研究室を昭和五八年(一九八三年)に巣立った同期一〇名(男性五名・女性五名)が、四二年ぶりに二〇二四年八月三日(土)、山口大学のある湯田温泉に集まりました。宿泊先の防長苑に到着後、それぞれ部屋に分かれ、懐かしい空気に包まれながらしばし休息。そして、時刻一八時三〇分から始まる昭和五八年卒業・西洋史研究室同窓会総会・懇親会に備えました。

今回集まったのは、西洋史研究室に所属した同期一〇名全員です。学生時代の氏名(敬称略)でご紹介すると、西村有生、田中みずほ、吉谷公仁子、河野亮次、倉永宣子、村田紀子、市川肇、森清珠実、池田達也、金山勉。卒業か

ら四〇年以上が経ち、それぞれが還暦を迎える年齢となりました。同窓会では、時が経つにつれて全員が揃うことが難しくなることを感じつつも、今回、誰一人欠けることなく集まった喜びを分かち合いました。



昔話に花が咲き、皆がまるで学生時代に帰ったかのようでした。話題は、大学時代にお世話になった①指導教授、②七夕祭のバザー、③秋の大学祭での映画自主上映企画など。当時の思い出を一つひとつ辿りながら、二〇二四年夏の同窓会は、まるで「山大人文学部・西洋史研究室」の歴史を語り継ぐひとときとなりました。

人文学部では二年度に研究室が決まり、それぞれ一〇名ずつ配属されていきました。私たちのゼミを指導してくださったのは、当時人文学部長でもあった渡辺真治(わたなべ・まさはる)先生と尼川創二(あまかわ・そうじ)先生。お二人ともすでに他界されましたが、当時の研究室での学び、学年を超えて集った一の坂川沿いの「惣野旅館」(明治三十九年創業)でのひととき、先生の言葉や表情など、それぞれの記憶を持ち寄りながら、遠い過去の学生生活をまるで昨日の日のように思い出しました。

私たちの期は、それぞれがマイペースでありながらも、まとまるべきときには一致団結する強さがありました。三年次の七夕祭では、当時珍しかったクレープ屋台を出店し、飛ぶように売れて大成功したこと。秋の大学祭では、映画

「風と共に去りぬ」(一九五二年公開・四時間近い長編)の自主上映を企画し、目を引く立て看板が完成したこと。それぞれの思い出を語るうちに、山口の夏の夜はあつという間に更けていきました。

社会に巣立ってから四〇年、それぞれの道は決して平坦なものではありませんでした。しかし、この仲間となら、日頃なかなか話せない人生の山あり谷ありの出来事も、気兼ねなく語り合うことができます。そして、笑いに交えて前を向く気持ちになれる。同窓会・同期会で全員が顔を揃えたことには、大きな意味がありました。

現在、メンバーは山口をはじめ、熊本、兵庫、京都、神奈川、岡山など全国各地に暮らしています。今回は兵庫での開催を目指そうという声が上がリ、「また元気に再会しよう」と約束して、それぞれの地へと帰路につきました。

(人文第二回卒・西洋史学)

西洋史研究室に貼られていた「風と共に去りぬ」のポスター



コロナ禍前
まだ「惣野旅館」の看板はかかったままだった

久々の再会

～老いて益々元気～

田平 智

もう一年過ぎましたが能登半島地震で亡くなられた二六〇人の方々の、ご冥福をお祈り申し上げます。又、復旧作業が円滑に進みますよう心よりお祈り申し上げます。更に新型コロナウイルスの爆発的な感染により世界全体で亡くなられた五〇〇万人の方々に心より哀悼の意を表します。

令和六年一月九日（土）一二時から広島市中区基町のホテルメルパルク広島で、私たち一九七一（昭和四六）年入学の「第六回文学科同期会」を開催しました。猖獗を極めたコロナパンデミックもようやく終息し、六年ぶりの再開でした。今回は社会学が世話係を担当しました。英文学の中村裕美さんが広島市在住ということで会場の選定や案内状のチェック、二次会の居酒屋紹介など多方面でサポートしてくれました。

山口大学文学科
S46入学同期会

2024年11月9日 ホテルメルパルク広島

さて、宴は前回に倣い、開会後三〇分は自由に食事、歓談をお願いしました。集合写真を撮り、その後、テーブルを移動し歓談を深めてもらいました。次は順番に近況報告です。目安として一人三分、質問二分で回していきます。

もう長年、小さい子供たちを相手に童話を読み聞かせる活動をボランティアで続けているIさんに聞きました。「子供たちに人気がある童話はなんですか？」「ジャックと豆の木」とのことです。理由は解らないとのことでした。又、無神論者であることを自負されている人もいました。確かに日本の仏教は阿弥陀如来のみを崇拜する浄土真宗、浄土宗とそれ以外に別れて分かりにくいと言えるでしょう。

テレビにも出演したOさんは今も潜伏キリシタンの研究を続けているとのことでした。

車椅子の白髪の紳士Gさんは起業した後藤経済研究所株式会社を運営しているとのこととす。又、純文学の小説も手掛けているとのこととす。次回お世話係の□さんは熱烈な広島カープファンで巨人ファンの親友と広島でちよくちよく飲むそうです。今回の同期会は山口の湯田温泉でやるそうです。Nさんは退職後も高校非常勤講師として週三日中国古代史を教えているそうです。Mさんは卒業高校の同窓会会長をやっているとのこととす。Iさんは今度友人とインドを訪ねて仏陀の足跡を巡るとのこととす。Tさんは読書家で仏の作家プーストの著作を半分位読んだそうです。Nさんはワングルで中央アルプスとか登山が趣味。Sさんは海外旅行が趣味で最近ではコーカサス地方を訪ねたそうです。Yさんは山口県庁勤めが長く現役時代は介護保険制度を定着させたとのこととす。

総じて各自、潑刺とした余生を送っており、老いて益々元気なことを確認できる懇親会となりました。

（文理第二四回卒 社会学）

鴻文会会則

（昭和五六年一〇月三十一日制定）

（総則）

第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口市平井七三二（沖田ビル二〇二）におく。

（目的）

第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学文学部の発展に寄与することを目的とする。

（事業）

第三条 前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 会報の発行及び会員名簿の管理
2. 会員相互の連絡、親睦の増進
3. その他必要と認められる事項

（会員）

第四条 会員は次のとおりとする。

1. 正会員 山口大学文学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学部研究科修了者
2. 特別会員 山口大学文学部学生及び大学院人文学部研究科院生
3. 教員、人文学部教員及び旧教員

（経費及び会費）
第五条 経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって当てる。正会員は、原則として入学時において、終身会費一〇、〇〇〇円を納入する。

（役員）
第六条 次の役員をおく。任期は原則四年とし、再任は妨げない。

1. 会長 一名
2. 副会長 二名
3. 委員 会長が委嘱する一五名以内の数とする。
4. 監事 二名

（役員の職務）

- 第七条 役員は次の職務を行う。
1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。

2. 会長、副会長及び委員・監事は役員会を組織し、会務を処理する。
3. 監事は会務及び会計の執行を監査する。

（顧問等）

第八条 役員会は名誉会長に人文学部長を、顧問に人文学部教職員経験者（本会正会員）及び会長経験者を、また会務運営のために幹事若干名を委嘱することができる。

（総会）

第九条 総会は四年ごとに開催し、次の事項を審議して出席者の過半数をもって議決する。

1. 事業の報告
2. 会計報告
3. 役員の選出
4. 会則の改正及びその他の重要事項

（支部）

第一〇条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

附則

省略
この会則は令和三年八月二八日より改正施行する。

《住所変更連絡のお願い》

毎回かなりの郵便物が返却されてきます。
住所に変更があった場合はご連絡をお願いします。

鴻文会事務局

Fax：083-928-4527

E-mail：kobun1981@ybb.ne.jp

鴻文会「賛助会員」の制度に

ご協力をお願いいたします。

鴻文会活動は、毎年度の新入生から入金される「終身会費」(一人一万円)をもとに行われます。

鴻文会は、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行・送付、ホームページ管理などの活動を行い、最近では山口大学同窓会との連携や「同窓会等」の開催に対する助成を行い、活動も多様化しております。これらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して安心できる状態ではありません。そのような中であって、ここ数年、卒業生会員や特別会員の皆様から多額のご厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えの賜でございます。ご協力ありがとうございました。

活動を支えて下さった方々のお名前を記して、お礼に代えさせていただきます。

なお、引き続き、賛助会員制度について、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

同封の振替用紙をお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしくお願い申し上げます。なお、その場合、払込み者に加算料金一〇円が発生します。ゆうちよ銀行の口座をお持ちの場合は口座からの払込みをおすすめします。(加算料金は発生しません。)

賛助会員(順不同 敬称略)

登城孝胤 佐伯邦昭 鈴木雅之 小池美佐子
森重祐二 渡邊早苗 中垣八朗 山口多賀子
石川哲也 村中雄一 高虫健二 鈴木千登世
水本孝二 大谷泰子 山岡典子 小野五百合
津田重喜 植田朋子 中島康吉 阿座上由衣
米谷健次 真田由衣 中澤辰江 小篠美智子
中尾哲雄 白石重昭 八田順子 細山田康弘
杉本敦子 藤本由紀 大鶴史子 濱崎勢津子
小川朝子 栗田憲一 清水康裕 武居スミヨ
藤井美枝 高橋幸輔 大塚博久 藤田加奈子

編集後記

木下明子 倉重雅子 兼村優子 田中加代子
本馬貞夫 宮原省吾 伊豫英城 田代枝理子
安田健三 品川道昭 柴田映美 椎野由紀子
芳野恵子 村岡建紀 小野美典 井上奈緒子
野村明夫 原田公平 山本直和 延谷由加里
村田和夫 富田一彦 古森繁樹 大内田晴俊
松井妙子 大港章子 藤澤真弓 大内田董子
宮崎祐子 久富貴司 山田典子 守田愉加理
神崎茂樹 阿部恭子 池田容子 戸谷美代子
吹屋哲夫 小山良昌 福田美紀 森田まり子
野村悦子 坂本貴志 山内正一 金山勉
野村昌弘 沖中武志 横田由香 渋谷律
原早苗 吉松茂 小野徹 島越郎
青木寛 梶真澄 池佳代 近藤勝
吳娜

令和六年一月一日〜令和六年二月三十一日

人口減少が止まりません。国では大学の規模適正化が急務として統廃合、定員削減を進めるとしています。そんな中、山口大学では今春から新たに「ひと・まち未来共創学環」が開設されます。是非新風を呼びこむ天窓を開け放つことになればと期待しています。(吉松 茂)

ここ数年、目の調子が思わしくなく、先日、手術・入院をしたところです。若いころから数回入院を経験しましたが、食事は昔とは比べ物にならないくらいいよくなり、看護・医療システムも格段に進歩しているのに驚きました。DXのすべてがよいとは思いませんが、このようなところにはとても有意義であると思った次第です。(森重祐二)

「令和」も気付けばもう「七年」。ついこの間、「平成」から変わったような気が……。そう言えば、生年月日を書く時、以前はM・T・Sの順番で最後の「S」に〇を付けていたのが、今はS・H・Rと先頭に。今年は戦後八〇年。「昭和」が遠くなっています。(山本明史)

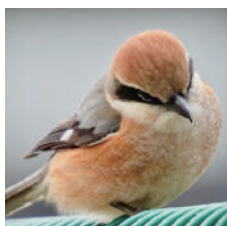
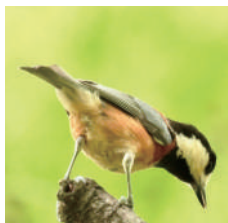
今回は、横田先生、太田先生、滝野先生、学生支援部職員の方が写真を提供して下さいました。感謝申し上げます。海外や山口、大学の風景も楽しんでくださると嬉しいです。大学構内に多くの野鳥が生息しているのですね。新たな発見でした。(渡邊早苗)

米の値段が上がっている。米は日本の酸性土壌に適しており、連作が出来る。苗を植えて水を張った田んぼは梅雨時のダム役割を果たしている。他の穀物に比べて収量が多い。米はおいしい。塩だけで食べられ、毎日食べても飽きない。このような米を作る技術と食べる習慣をなくしてしまつたらどうなるのだろうか。国民の主食のコメを経済だけに任せてよいのだろうか。(大谷泰子)

大学の正門右にオークの木が立っています。エリザベス女王ゆかりの木の子孫で、丈夫に育ち木下には実生の苗木も見られるそうです。山口には維新公園に日英グリーン同盟の記念樹のオークも。異国の地に根を張り葉を繁らす逞しい姿に前へ進む勇気を貰えるようです。(鈴木千登世)

月・火・木曜日の午後一時から五時まで事務の宮澤さんが勤務しています。付近にお越しの折には、鴻文会事務所(沖田ビル二階)にお立ち寄り下さい。会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。(一同)

左 ヤマカラ 第一学生食堂前



右 モズ(オス) 野球場にて

社会学同窓会の皆様へ

社会学同窓会報は2025年の発行分から郵送にかえて鴻文会のホームページに掲載することとなりました。

また、社会学同窓会総会のご案内も同じくホームページにてお知らせします。

下記にアクセスしご確認ください。

鴻文会ホームページ URL: <http://kouhun.la.coocan.jp/index.html>

会報は「社会学同窓会報」、同窓会総会のご案内は「新着情報」に掲載します。



第12回 鴻文会総会のご案内

日 時 **令和7年10月18日（土）** 13時～16時30分

場 所 山口大学 人文学部

当日の日程 受 付 12時30分より

総 会 13時～13時40分

公開講演会 14時～15時

演題「脱炭素を目指す新技術は社会実装へ 山あり谷あり（仮）」

講師 渡辺啓太氏（人文学部1992年卒、人文科学研究科1996年修了

株式会社富士経済 モビリティ・ソリューション事業部）

記 念 撮 影 15時10分

懇 親 会 15時30分～16時30分

平素から鴻文会の活動に対しご支援とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

この度、4年毎に開催される鴻文会総会及び講演会を、上記のとおり、人文学部小講義室、大講義室を会場として開催する予定です。是非ご出席くださいますよう、ご案内申し上げます。

出席くださる恩師の方々の情報や会場変更など、ホームページ上でお知らせします。

URL：<http://koubun.la.coocan.jp/new.html>



資料準備等のため、ご出席の場合は10月9日（木）までに鴻文会事務所にEメール、郵送、電話又はFAXによりご連絡くださるようお願いします。

懇親会費 2,000円は当日集金します。

連絡先：〒753-0831 山口市平井773-2 沖田ビル202

電話・FAX：083-928-4527 メール：kobun1981@ybb.ne.jp



第10回総会、懇親会の様子

総会当日に企画される研究室同窓会の情報が入りましたら同窓会ホームページでお知らせします。
こちらを上記URL、QRコードからご確認ください。